

兵庫・三條九ノ坪遺跡

さんじょうくのつば

1 所在地 兵庫県芦屋市三條町

2 調査期間 一九九六年(平8)九月~十一月

3 発掘機関 兵庫県教育委員会

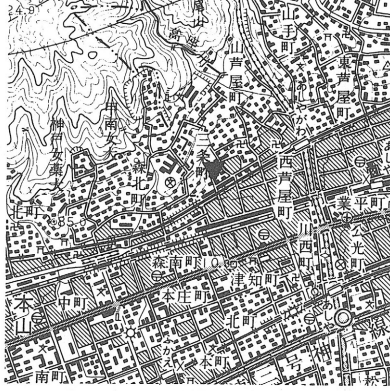
4 調査担当者 高瀬一嘉・半澤幹雄

5 遺跡の種類 水田跡・自然流路

6 遺跡の年代 古墳時代~奈良時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

三條九ノ坪遺跡は芦屋市の西部、神戸市との境界近くに位置し、芦屋台地から流出した土砂によって形成された標高約三〇mの扇状地上に立地している。これまで芦屋市などによって合計一五次の調査が実施されてきた遺跡である。今回の発掘調査は阪神淡路大震災の被災マンシヨンの再建に伴うもので、調査面積は約六〇〇㎡である。



(大阪西北部)

検出した遺構には水田跡

と流路がある。流路は幅約七m、深さは最深部で検出面から一mを測る。流路の方向は北東から南西に流れ、調査区内で屈曲して南に方向を変えている。屈曲部西岸には杭列が検出された。攻撃面にあたることから護岸の目的で設置されたものであろう。流路の南側には水田跡が展開しているが、両者に切合い関係は認められない。さらに、流路から水田跡に水を供給していたと考えられる取水口を一方所検出していることから、流路と水田は同一時期に機能していたものと思われる。

遺物は流路内から出土したものが大半である。流路内からは、弥生時代後期末~平安時代初頭の遺物が出土しており、大半は土器であるが、木簡・下駄・木錘・曲物・鞆・杭などの木製品も出土した。土器は古墳時代後半から末にかけてのものが多く、奈良時代以降のものはごく上層に限られる。木簡は二点出土しているが、一点は全く判読不可能であり、釈読を行なった一点について報告する。

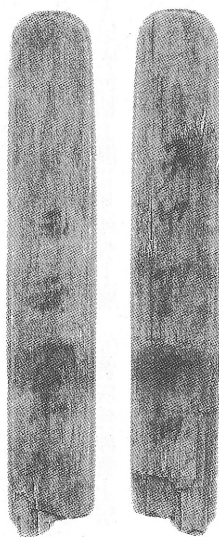
8 木簡の釈文・内容

(1) ・「子卯丑□伺

・「三壬子年□

(199)×33×6 019

下部を折れによって欠失したものである。〇一九型式としたが、上端を円形に仕上げしており、両側面にも面取りを行なっている。表裏面ともに比較的平滑に整えており、丁寧な作りの印象をもつ。



表面は十二支を表現しているようであるが、順不同であり、意味は明らかではない。

裏面は年号と考えられ、年号で三のつく壬子年は候補として白雉三年（六五二）と宝亀三年（七七二）がある。出土した土器と年号表現の方法から勘案して前者の時期が妥当であろう。

釈読については兵庫県立歴史博物館の小林基伸氏のご教示をいただいた。

（高瀬一嘉）